



令和元年・第16回 さいたま市障害者協議会総会

2019年5月27日 14時～16時

令和の時代が幕開けした五月、多くの来賓の皆さまをお迎えし、第十六回総会が開催されました。



今年度は、新たに高次脳機能障害ナノさいたま当事者会・家族会と、一般社団法人みつくすビートの加盟がありました。また六名の方が新理事となられ、ごあいさつを頂きました。

いよいよ来年は、東京オリンピック・パラリンピックの年となり、障害に対する理解を深めてもらう絶好の機会とされています。障害者協議会としても、果たすべき役割を再確認し、一つ一つの事業を着実に実行していきたいと思えます。皆さまのご協力をよろしくお願い致します。



令和に向けて さいたま市障害者協議会が目指すもの

令和にむけて

さいたま市障害者協議会会長
中野 勇

平成の時代が三十年で終わりを告げ、四月三十日天皇陛下が退位され新天皇が五月一日に即位して令和時代がスタートしました。

私として、昭和時代、平成時代の二代にわたり種々多様な時代を経験してきました。平成の天皇陛下さま、長いこと平安を案じて国のため、国民のために全勢力を傾けて下さいました。令和天皇陛下さまは、これからの時代を背負っていく方です。多いに平安の時代であることを念じております。

私達、さいたま市障害者協議会役員として二年目に入ること、令和時代に当たり役員一同、心新たに月一度の理事会、三役会、又事務局員ともどもいっそうの精進を図るつもりであります。

五月二十七日に、第十六回さいたま市障害者協議会定期総会が午後二時より、大宮ふれあい福祉センター

三〇一〜三〇三号室にて、五十四名の参加を得て、来賓にさいたま市長代理 さいたま市保健福祉局福祉部障害支援課長西淵亮様、さいたま市議会副議長 高柳俊哉様、さいたま市社会福祉協議会事務局長青柳勝久様、さいたま市社会福祉事業団事務局長坂田恒士様を迎え盛会に開かれ、さいたま市手をつなぐ育成会の加藤シゲヨ様に議長をお願いして、三十年度事業報告及び決算、並びに三十一年度事業予算を審議し、無事に承認されました。

これも、ひとえに障害者協議会加盟団体並びに会員の方々のご支援のおかげだと深く感謝申し上げます。



「令和元年にむけて」

副会長 渡辺 浩二

新元号、令和元年に始まり、去る五月二十七日には、第十六回総会が行われ、令和元年度、事業計画案、予算案が承認されて、令和元年度がスタートしました。

さいたま市障害者協議会、加盟団体の皆さま方におかれましては、日頃よりさいたま市障害者協議会、およびさいたま市障害者社会参加推進センターの運営にご理解とご協力を賜りまことにありがとうございます。これからも、皆さま方のご期待に沿えるよう努めてまいりますのでよろしくお願いいたします。

「障害者週間市民のつどい」のコーナーレでの開催が五年目を迎えます。昨年以上に多くの市民の方々に来ていただき、盛り上げていきたいと考えています。それには、昨年の反省を踏まえ、アイデアなどを出していただき、実行委員、行政が一致協力して成功に導いていきたいと思っております。

また、このほか障害者社会参加推進事業の「生活訓練」「家族教室」「ノーマライゼーション条例」の推進のため

の学習会「埼玉障害フォーラム」などに積極的に参加を呼び掛けていきます。私達、役員も積極的に参加してまいります。

最後に今年一年、副会長として、誠心誠意、協議会発展のために全力で取り組んでいきますので、よろしく願いいたします。



昭和〜平成〜令和と なつて

副会長 米山 恵美子

2019年5月1日から新元号「令和」となりましたが、私共障害者と介護老人を抱える家族には、何の変わりもなく新しい元号年を迎えました。私自身は昭和、平成、そして令和と3回の年号を重ねました。平成では、阪神淡路大震災と東日本大震災を体験しました。

私が生まれ育った昭和は戦後の傷跡がまだ残る時代でした。父親に連れられて茨城から上野動物園へ遊びに来たときは、上野駅地下道には多くの浮浪者や、体中包帯でぐるぐる巻きにした、いわゆる傷痍軍人が土下座して物乞いをする姿に子供心には、深いショックを受けました。成人になって就職のために上野駅から、地下鉄銀座線に乗り換えるための地下道は、まだ汚くにおいもきつかった思い出があります。

東京オリンピック、大阪万博と飛ぶ鳥のごとく日本の高度成長期がやってきて、みんな一生懸命に働いていました。

私はやがて結婚をして、昭和の後半と平成4年に子供を産みました。一人

っ子の長男の嫁として三世帯同居の生活を送っていました。三番目の跡取り息子(家人曰く)が障害をもって生まれました。私は、一念発起してそれこそ誰が何と言おうとこの子がみんなに愛され、幸せに一生を送れるように一生懸命育てることにしました。幼児期には、よその人とのトラブルばかり続き一軒、二軒、三軒……と数えきれなくらい私たち親は謝って回り、時には土下座をしたものです。「なんてみじめなんだ」と涙を流したつらい時期がありました。でも、それ以上に本人は、自分の思いの伝達がうまくいかなかったもつと苦しんでいたのだろうと思います。今は、成人になり嘘のように落ち着きあいさつや返事、他人の指

示が入る成人になりました。重度知的障害者ですが、彼の性格の明るさと人懐こさに救われています。私は、今股関節痛が悪化し、今度は

新しい時代に

副会長 竹内 政治

時代は平成から令和に代わり、この春は大変おめでたい雰囲気がつづきました。

しかし、変わったことといえれば何もなく、あの浮かれムードは政府の目くらましかったとしか思えません。好景気の恩恵もほとんど得られませんし、年金もこの先いつ切られるかわかりません。いつも救いは仲間同士の助け合いや移り行く季節の匂いだったりします。

私は新しい時代に、さいたま市障害者協議会の仕事を頑張ろうと思います。障害があっても生きていける。しかも、よりよい人生を送っていけると信じて与えられた仕事に励もうと思います。また、障害者だけで完結するのではなく、社会に向けて発信をつづけたいと思います。

自分を修正する時が来ました。治つたら一緒のお出かけも楽しくなることでしょう。こんな令和の時代を送りたいものです。

障害があるなしに関わらず生きづらい世界で、誰もが素晴らしい人生を歩む権利が私たちには与えられています。それが阻害されているのは社会システムが歪んでいるからです。少しずつでもいいから世の中を良くしたい。それは選挙に投票にいたり、声にならない感情を代弁したりすることからはじまるのかもしれませんが。

ひとりではできないことが多くあります。そんなとき、さいたま市障害者協議会が何かのお力になれば幸いです。



精神科訪問医療を考える

「しっぽふぁーれ」 伊藤 順一郎先生

さいたま精神家族教室が3月29日、大宮ふれあい福祉センターで開かれた。講師の伊藤順一郎先生は、メンタルヘルス診療所「しっぽふぁーれ」院長で、地域社会で精神障害者訪問支援（アウトリーチ）を実践しており、貴重な話を語っていただきました。

専門家チームで対応

伊藤先生は障害者が、適切な医療・保健・福祉などのサービスを受けるための支援活動をしており、千葉・市川市に2015年4月開業。訪問診療を中心に一日5件から6件、40名くらいの患者を担当しており、診療は自転車と軽自動車で移動しています。

診療所のフロアには、NPO法人リカバリーサポートセンターACTIPSがあり、精神科医・看護師・精神保健福祉士・作業療法士・就労支援専門家・事務などの

多職種で編成する17人のスタッフが在籍しており、一つのチームとして支援活動を行っています。

サポートを届けたい

医療を受けている方でも中断している人や、再入院を繰り返している人もおり、話を聞いたりして、薬を投与している。引越しの問題や、借金、近隣苦情、保証人、ひきこもり、ゴミ屋敷状態、金銭管理のマネージメントなどのさまざまな問題を抱えており、医者一人では限界があるのでチームを組んでサポートしている。米国で1980年代にACTチームを結成しており、その理念を参考にしています。

医療費構成（平成17年度白書）によると、医療費に占める入院費用は一般診察医療費の5割を切っているが、精神医療費の場合、7割が入院費用となっており、今で

も変化がない。

入院患者の平均年齢は60歳以上。「なぜ長期入院なのか?」。退院後に預けられる場所がなく、入院

以外の選択肢がないのが実情です。そのために長期入院を強いられる。地域社会を病院化することではなく、地域社会で支えたい。急性入院を防ぐためのシステムが地域に必要なのではないかと。私は、アウトリーチで入院を防ぐことを目指したい。5分間診療では、適切なサービスは不可能。入院となると症状を抑えることが優先される。薬はギリギリまで減らし「普通の場」での診察を考えたい。また、地域で活動する人たちと連携して、「多機能型精神科診療所」を目指したい。サービスの質が向上するので実現すると良い。

援助技法について

「症状で人を見ず、背中を目を向けたい」。患者の思い・辛さを汲み取り、上から目線ではなく、苦しみを本人とともに考えながら、関係者や家族でも本人不在のこ

ろで話を進めることがあるが、本人のことは本人のいないところは決めない。

参加者の発言から

▼当事者の人権を見ており、価値と目線を変えていると感じました。薬投与だけで治すのではなく、当事者の人生を考える大切さが伝わってきました。

▼重症の息子を20年見えています。本人が苦しむと私も回復して欲しいと願っています。薬を飲んで治すのではなく、本人との向き合い方を学びました。認めて付き合っていくことで気持ち楽になります。



深刻化する「ひきこもり」

年号が令和になってから社会を揺るがす事件が起きた。小学校の児童と保護者を襲撃して20人を殺傷した「川崎殺傷」、家庭内暴力の末に実父が長男を殺害した「練馬刺殺」。立て続けに起きた二つの事件に共通するのが「ひきこもり」です。

「川崎殺傷」「練馬刺殺」

川崎殺傷事件は5月下旬に発生。容疑者(51)は幼少時から、80代の伯父夫婦と暮らしていたが、伯父夫婦が介護サービスを受けるに当たり、親族から何度も相談を受けた川崎市は「長期間働いておらず、ひきこもりがち」「家族とコミュニケーションが取れていない」と聞いたと明かした。

親族は、第三者が家に入ることへの容疑者の反応を心配していたという。事件直後に首を切って自殺した容疑者の動機解明は難航している。

川崎殺傷から4日後、練馬区の自宅で元官僚の男性(76)が無職の長男(44)を刺殺した事件。長男は中学2年の頃から、いじめを受けて不登校になった。最初は母親に暴力をふるい、父親にも殴るなどの暴行を加えるようになった。大学進学を機に一人暮らしを始めたが、事件の一週間前に再同居。両親に暴力を振るい始めた。事件

当日、自宅隣の小学校で運動会が開かれていたが、長男は「うるせえな、ぶつ殺すぞ」と騒ぎ出した。殺人の動機について父親は「川崎の事件を思い起こし、児童らに危害を加えるかもしれないと不安に思った」と供述している。

長男の暴行を関係機関に相談した形跡はなかった。父親は真面目な性格で、職場では人当たりの良い人物。他人には家庭内のことは当事者にしか分らないが、家庭内暴力で親子関係が壊れてしまったとしても、息子を殺していい理

由はない。

また、家族から依頼を受けて、ひきこもりの人を本人の了解なしに家族から無理やり引き離して、共同生活型の「自立支援」施設に入居させて、多額の報酬を要求する「引き出し業者」もいます。

本人は強引に引き離されたことが原因によるトラウマで、親子関係を断絶させることもあるので、安易な方法で「ひきこもり」を解決しようとは考えないでほしい。

「8050問題」が鮮明に

仕事上の挫折、うつ病をきっかけにした中高年のひきこもりも増加しており、親も高齢化することで問題が深刻化している。内閣府は3月、自宅に半年以上閉じこもっている「ひきこもり」の40〜64歳が、全国で推計61万人いるとの調査結果を発表した。15〜39歳の推計54万人を上回り、ひきこもりの高齢化、長期化が鮮明になった。家族以外と交流がなく、近所のコンビニ以外に外出しない状態が6カ月以上続くことを「ひきこもり」

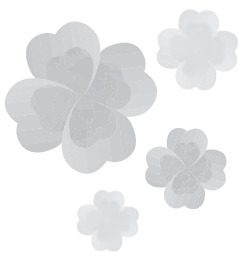
と定義しています。

引きこもっている本人が公的機関に相談にくることはまれで、専門家が訪問を重ねて、本人や家族と根気よく話す必要があるが、訪問支援する専門家の技術向上研修や相談体制の強化を望みたい。

4月からアウトリーチ実施

さいたま市は、4月から見沼区、緑区をモデルエリアとしてアウトリーチを実施。医師・保健所・福祉分野などの専門職で構成されるチーム編成で、6月までで訪問支援を12回行っています。より充実した支援内容を期待します。

(障害者家族会連絡会・鈴木義男)



新加盟団体の紹介

高次脳機能障害ナノさいたま当事者会・家族会
(略称：高次脳機能障害ナノさいたま) 代表 渡部真喜

わたしたちの会は、さいたま市の「はじめの一步」に参加し、「地域で共に生きるナノ」に出会えたことをきっかけにして誕生しました。当事者を中心に、家族や支援者に支えられながら運営しているため、当事者会であり、家族会でもあることが会の名称の由来です。

高次脳機能障害は、脳卒中、脳炎、脳症や、交通事故等の頭部打撲などから発症する障害で、①新しいことが覚えられない(記憶障害)、②気が散りやすく集中できない(注意障害)、③うまく計画を立てて実行できない(遂行機能障害)、④言葉が出てこない(失語症)、⑤怒りっぽくなる(社会的行動障害)などの症状がありますが、外見では分かりにくく「見えない障害」とも言われます。

高次脳機能障害当事者は、一歩踏み出したい、社会とつながってほしいという気持ちもあり、家族もそれを望んでいるのですが、思い通りに実行できないのが、高次脳機能障害の当事者な



ので、私たちの会は、当事者、家族、支援者が集まる場を設けようと、さいたま市市民活動サポートセンターで毎月1回、障害者更生相談センターでは毎奇数月に1回、集まりを開催し、「高次脳機能障害ナノさいたまのブログ」でも情報を発信し続けています。

さいたま市高次脳機能障害者支援センターと連携し、誰にでも発症する可能性がある障害ですから、さいたま市内外の高次脳機能障害当事者、家族のためにも、互いに支えあいながら、高次脳機能障害当事者や家族が安心して暮らしていけるよう活動しています。

一般社団法人みつくすビート さいたま市地域活動支援センター NEUE

一般社団法人みつくすビート さいたま市地域活動支援センターNEUE になってから、早いもので2年が過ぎました。現在15名のさまざまな障害のあるメンバーが活動に参加しています。障害があっても、自分らしく社会の一員として地域で暮らしていきたいと、

当事者団体の開催する勉強会やイベントにも参加しています。日々の活動としては、パンやその他の物品の販売があります。クッキーやパウンドケーキはメンバーが作って売っています。最近では美味しいと売れ行きも好調です。これからは種類も増やしてどんどん売

っていききたいと、クッキー班のメンバーの気持ちは上がっています。私たちは、人力車(大宮ふれあいセンター内)、ピアシヨップ(区役所内)、輪っふる(埼玉トヨペット内)などで販売をしています。たくさんの人達とふれあいながら、笑顔をもたらしています。みつくすビートノイエの事務所は、北区土呂町にあります。売り上げ計算や帳簿付け、銀行への入金など、販売に関わる仕事をみんなで手分けしてやっています。また、日々の活動やメンバーの思いを「みつくすビート通信」として、年10回発行しています。編集長はメンバーの持ち回りで担当し、普段のメン

バーの様子や思いなど、読者の皆さんにお伝え出来るように、試行錯誤しながら作っています。パソコンを使っている紙面作りは難しい事もありますが、少しずつ上達するのを励みに頑張っています。年間を通して、楽しいリクリエーションもたくさんあります。映画鑑賞、カラオケ、日帰り旅行、キャンプ、研修旅行、クリスマス会等々。ボランティアさんにもご協力頂いて、いろいろな体験、経験ができます。その時の感動や、うれしかった事など通信で発信をしています。是非、みつくすビート通信をご一読ください。この度、みつくすビートとして、協議会の仲間入りをさせていただきましたが、地域に生きる一人として、地域を巻き込んだ行事が出来たら良いと思っております。例えば、餅つき大会など楽しそうではありませんか。これからも皆さまと一緒に新たなチャレンジをしていきたいと思っております。



『社会参加推進事業の意義と今後の展望について』

本年度、さいたま市障害者社会参加推進センター運営事業及びさいたま市障害者生活訓練等事業の担当となりました、さいたま市障害支援課地域生活支援係の小林と申します。

皆さま方におかれましては、日頃より本市の障害福祉施策に多大なるご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、先に挙げました障害者協議会に委託をしております二つの事業につきまして、簡単ではありますが、この場をお借りして改めてご紹介させていただきます。

まず、これらの事業の目的でございますが、障害のある方々の自立や社会参加の促進などを図ることであり、社会参加推進センター運営事業においては、社会参加推進センターの設置及び社会参加推進協議会の運営やセンター定期刊行物発行などを行っております。

また、障害者生活訓練等事業においては、各障害者団体が考案した企画のもと、障害のある方及びそのご家族等を対象とし、日常生活に必要な訓練・指導や講演会などを行っております。

今後、障害のある方々の社会参加の促進のため、特に生活訓練等事業に

おきましては、各障害者団体による障害のある方の実情に合わせた幅広い企画をご考案いただき、より多くの市民の方々にご参加いただける機会をつくらせたいと存じます。引き続き、ご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



障害者週間・市民の集い

さいたま市「障害者週間」市民のつどいは、障害者基本法に基づく12月3日から9日までの「障害者週間」を記念して、障害のある人もない人も共に生き、支え合う社会を実現していくために、市民の皆さんに障害者への理解と関心を深めていただくこと、障害者の社会参加の促進を図ることを目的に毎年開催しているイベントです。

今年は12月7日の土曜日（10時から16時まで）に、浦和コミュニティセンター（コムナール10階）と浦和駅前駅前市民広場を会場に開催します。

今年、NHKアナウンサーから、医療的ケアが必要な子どもと家族のための短期入所施設のハウスマネージャーに転職され、ご活躍されている内多勝康氏に基調講演をお願いしています。

基調講演のほかにも、浦和コミュニティセンター多目的ホールでは「心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター表彰式」や、10月に茨城県で開催された、さいたま市から毎年選手団を派遣している「全国障害者スポーツ大会さいたま市選手団の結果報告会」の式典や、数々のコンクールで入賞している宮原中学校合唱部による合唱、統合失調症を抱えながら活躍している松本ハウスによるトークショーなどを予定しています。

また、浦和コミュニティセンター10階では障害者団体の皆さんによる参加・体験型の団体企画や、作品展示、ピアショッピングの出店などを行います。

浦和駅前市民広場では、障害者施設のみなさんによるダンスや歌などのパフォーマンスに加え、いよいよ来年に迫ったオリンピック・パラリンピック関連ブースや、パラリンピック正式種目のボッチャ体験を行います。他にもおいしい飲食物などの販売も予定していますので、軽食を楽しみながらゆっくりとご覧ください。

当日は、多くのスタッフ・ボランティアさんが、皆さんのご来場をお待ちしています。



相談事業研修会

摂食障害の克服へのアプローチと題して、今年の一月二十七日の日曜日に浦和コミュニティセンター第十五集会所で研修会を開催しました。

講師は渋谷哲生氏です。渋谷さんは摂食障害の自助グループたちあおいを立ち上げ食にこだわる活動をしていきます。渋谷さん曰く、摂食障害は精神疾患に分類されているため病気という位置づけがされていて、それをどう克服していったらいいのか今回みんなで考えていきたいという意気込みでした。

参加者は約六十名でした。深刻な問題なので、みんな真剣に聴いていました。講演は渋谷さんの生い立ちからはじまって、学生生活や社会に出てからの話から、たちあおいをはじめたことや仲間が集まることの大切さを強調されていました。

講演のあと休憩を挟み摂食障害当事者たちのディスカッションがありました。過食嘔吐でトイレを汚してしまったり家族に摂食障害とばれなかったか？という質問に当事者は絶対ばれていないと答えていましたが、どうなのかなあと思いました。

最後になりますが、この研修会には摂食障害という切実な問題を抱える当事者や家族が参加しました。それに対

する答えは残念ながら提示できなかったのが残念でした。



平林 彰さん 追悼

障害者（児）の生活と権利を守る

さいたま市民の会 赤沼 智子

私が平林さんと出会ったのは三十年ぐらい前になると思います。障害児教育の仕事について子どもたちの成長が学校の中だけではなく、地域社会や世界の情勢とも関連していることに気づき始めた頃でしょうか。

上尾養護学校時代に地域の障害児者の生活と権利を守る市民の会に参加し、浦和の市民の会にも参加させてもらいました。市民の会の活動にはいつ

も平林さんの姿があり、学校のこと、子どもたちのことなどいろいろ聞いてもらいました。平林さんはご自身の障害による社会の理不尽さや十分に権利が保障されてこなかった歴史などを踏まえて、子供たちの教育環境や進路の問題、地域の生活など共感を持って受け止めて、解決策を一緒に考えてくれました。必要なときは県の交渉でもしっかり取り上げて訴えてくれました。いっぱい学ばせていただきました。子どもたちのことなど、多くの仲間のことを思いやり、自分のこととして解決のための運動を前向きに進めてくれました。

やさしさと強さ、みんなと楽しく運動する、めげないこと、大事な教訓をいただきました。ありがとうございます。：やつぱりこれからも見守り続けてください。



編集後記

第十六回の総会も無事終わり事務局としては一息ついているところです。今年度の生活訓練・家族教室は十五事業の参加をいただきました。令和の振り出しは好調のようです。市民のつどいも第一回・第二回と実行委員会を重ね、十二月七日に向けて着々と準備を進めております。平成十七年に入職以来、会計を担当させて頂いております。行政のご指導もあり平成三十年からより分かりやすい表示形式に変更いたしました。日々問題は多々ありますが、その都度、事務局員二人で頑張っております。これからも皆さまのご協力を頂きながら、より良い障害者協議会に発展させて行きたいと思っております。

事務局 K

さいたま市障害者協議会
会報あ・うん第25号
発行 さいたま市障害者協議会
会長 中野 勇
編集 さいたま市障害者協議会広報委員会
〒330-0801 さいたま市大宮区土手町1-213-1
大宮ふれあい福祉センター 4階
TEL 048-653-7271
FAX 048-653-7341
http://www.saitama-planet.com/
e-mail saitamacity-handynet@bz03.plala.or.jp

この会報は、共同募金の配分を受けて発行されています。